

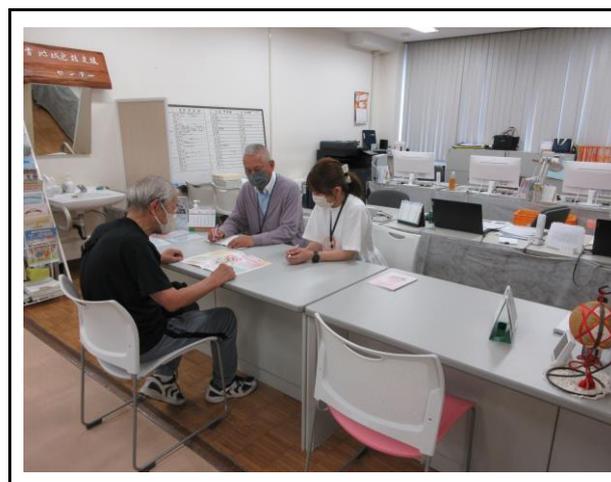
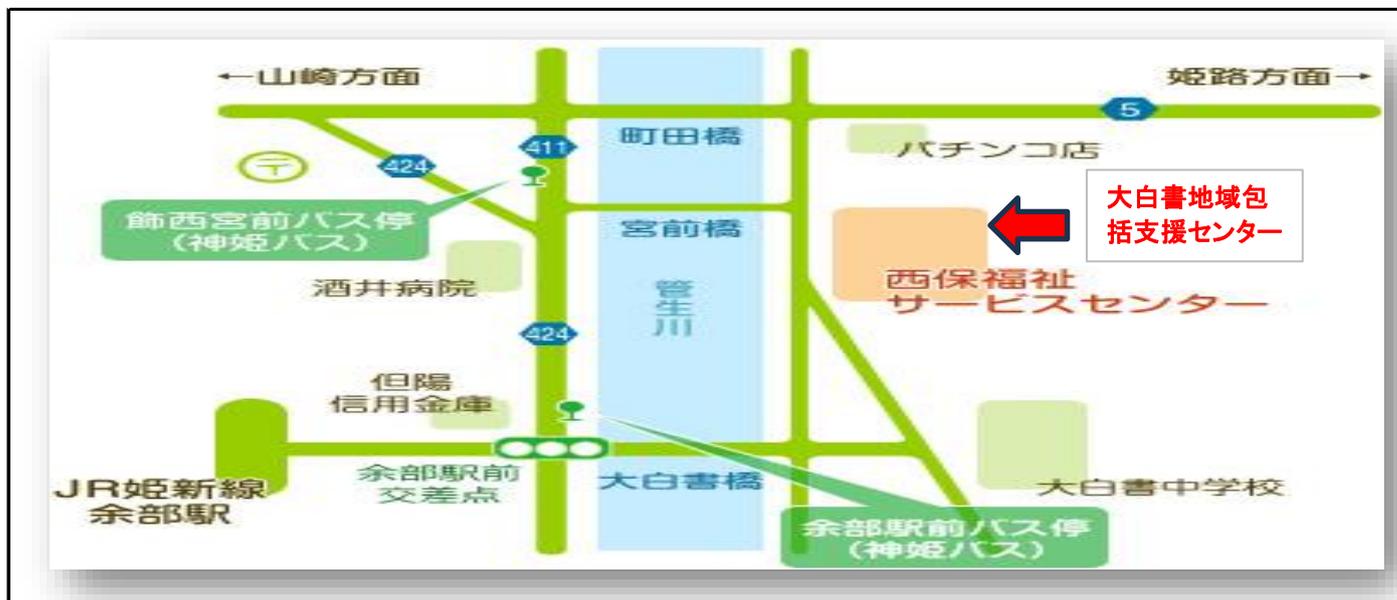
地域包括支援センター適正運営評価 基本調査票

【地域包括支援センター概要】

センター名称	姫路市大白書地域包括支援センター
法人名	社会福祉法人よい子の広場福祉会
統括責任者名	小柳 有里
管理者名	小林 秀彦
所在地	〒671-2216 姫路市飾西728番地5 (西保健サービスセンター内)
電話	079-267-3929
FAX	079-227-0009
メールアドレス	sien@himawarihome.or.jp
ホームページURL	https://himawarihome.or.jp/daihakusho

【センターの案内】

センターまでの交通手段	JR姫新線余部駅下車余部駅前交差点を東へ。大白書中学校前を北へ徒歩8分。(姫路市西保健サービスセンター1階)
-------------	--------------------------------------------------------



【センターが所在する地域の特徴・特性】

大白書地域包括支援センターは異なる特性を有する3つの校区を管轄しており、それぞれの特性を考慮し、地域福祉の発展に寄与するための活動を行っています。以下、校区ごとの特徴について記載します。

- ・太市…ほぼ全域が市街化調整区域となっており、農業を主体とした地域で市内でも最も高齢化が進んでいる昔ながらの農村地域です。バスや電車など公共交通機関はあるが、運行数が少なく、生活関連施設や介護保険関連施設に乏しいため、地域住民の連携は自治会が主体的に取り組む必要があります。
- ・青山…昭和40年から急激に新興住宅や公営住宅、マンションが建設され他地域から転入された方々と永く青山地区で暮らしてこられた住民が共存する地域となっています。各自治会単位も公営住宅や新興住宅単位で組織されており、住民の価値観や考え方も多岐に渡っています。このため、意見の集約や住民活動における方向性の統一に課題があると言えます。
- ・白鳥…従来からの旧村と新興住宅が混在しており、太市型と青山型の2つの特性を併せ持った地域です。病院や介護施設等の社会資源と自治会、老人会、民生委員といった各種団体の連携を強化することで地域福祉を活性化できるものと考えます。

【特に力を入れている点・アピールしたい点】

・地域包括支援センターの業務委託を受けた初年度として、広く地域住民の方々に周知していただくことを最大の目標として取り組みを進めています。具体的には、地域包括支援センターの紹介チラシを作成し、自治会、老人会等の地域内組織や、認知症サロン、ふれあい給食等の集いの場等で配布しました。「ほうかつだより」を年4回発行し、上述の団体に加え、金融機関やコンビニエンスストア、介護保険施設等の様々な社会資源に配布し、認知度の向上を図っています。また、地域の実情に精通し、地域課題を把握されている民生児童委員との連携強化を目的に、地区ごとの民生児童委員研修会や校区代表が参加される幹事会には毎回参加し、密な情報交換を実施しています。圏域内で16か所運営されているいきいき百歳体操では、計画的に訪問スケジュールを立て、活動が継続できるよう楽しみを感じられる講座を開催したり、世話人の負担軽減を図るためにレクリエーションを提案するなどの後方支援を行っています。

【令和5年度末の担当圏域の目指す姿】

- 1, 高齢者に介護予防の知識が普及し、フレイル予防が定着する。
- 2, 地域住民が認知症の知識を持ち、認知症の支援者として活動に参加できる地域になる。
- 3, 支え合い会議から抽出した地域の課題について話し合う。

地域包括支援センター適正運営評価 評価意見書(総評)

センター名称	姫路市大白書地域包括支援センター
実地調査日時	2024年 9月 10日
評価調査者名	カ久恵弥 山本礼子 大谷幸三

【第三者評価で確認した特徴的な取り組み、工夫点】

特徴的な取り組みとして、男性介護者の会を定期的で開催しています。情報交換の場として有益なほか、介護者が孤立しないための予防策となっています。
また、ほうかつ便りには、地域住民が手に取りやすく、目を引きやすいように紙の質感や色味に工夫をされています。内容には、集いの場に来られない方に対し、外出を促すだけでなく自宅でできるフレイル予防の活動などを掲載しています。

【第三者評価で確認した次のステップに向けた気づきや取り組みを期待したい点】

特徴的な取り組みとして、男性介護者の会がありますが、今後は介護者の性別や年齢にとらわれない集いの場を作っていく取り組みに期待しています。
いきいき百歳体操といった地域のグループの後継者不足による解散があり、自治会、民生児童委員連合会など、地域の団体と交流を持ち続けることにより、グループ存続のサポート体制を構築していくことが望まれます。
小中学校での認知症サポーター養成講座を開講されており、今後は地域の企業などとの連携についての取り組みにも期待します。

【市民(住民)からの意見やコメント】

専門用語が多く、わかりにくいところがありました。
非常に努力されているのがわかりました。これからも頑張ってください。

【評価結果に対する地域包括支援センターのコメント】

少子高齢化が加速する社会情勢下では、様々な社会資源の活用や連携が不可欠となっています。その中心的役割を担い、地域の高齢者にとって馴染みやすく、頼りになる地域包括支援センターとして認知していただくために汗をかき、知恵を絞りたいと思います。

		地域包括支援センターの体制確保	
		(基本的な考え方) 地域包括支援センターは地域包括ケアシステムのコーディネーターとして、高齢者分野の困りごとを地域で受け止める役割を果たすものであり、地域包括支援センターが、介護サービスの相談先以外の役割として地域で認識されることが必要です。	
評価項目・着眼点		地域包括支援センターの周知	
	①	地域包括支援センターが、介護サービスの相談先以外の役割を持っていることを地域で認識されるようになる。	
		専門性を生かした地域包括支援センターの運営	
	②	専門知識、対応力を備えたセンターのスタッフの確保と人材育成を図る。	
		地域包括支援センターの業務の効率化に向けた取り組み	
③	オンラインミーティングをはじめとする業務のICT環境の整備や事業の整理・統合など、業務の効率化に向けた取り組み		
センター記入欄	取り組みの状況	<p>①圏域内の各種団体や高齢者の集いの場において地域包括支援センターと職員紹介のパンフレットを配布し、啓発活動に取り組んでいます。</p> <p>②地域包括支援センターに寄せられた相談については全て毎日のミーティングにおいて職員全員で情報共有しています。また、相談を受けた後の初回訪問は2名の職員で行い、夫々の専門知識を生かした聞き取りや情報の分析を行い、適切な対応ができるよう努めています。職員の対応力向上を目的に勉強会を実施しています。</p> <p>③研修会や各種会議には可能な限り参加し、広く情報収集に努めています。</p>	
	現在課題と感じていること	<p>①地域包括支援センターについて、高齢者の方々の理解度を高める為、身近な存在であることを訴求する多様なアプローチを試みる必要があります。</p> <p>②地域福祉のハブ機能を有する部署として迅速かつ適切に各種専門機関と連携するため、他の専門機関の業務内容を把握することが必須であると感じています。</p> <p>③業務の効率化を図るため、オンラインでの会議参加が標準的となっておりますが、いまのところ、地域包括支援センター内で個別の参加用スペースを確保できていないことが課題です。</p>	
	目標達成のための今後の取り組み	<p>①一例として、「福祉まつり」等のイベントを企画・実施することで地域のコーディネーターとしての役割を担っている機関として認識してもらえよう取り組みます。</p> <p>②地域包括支援センターの対応力を高めるための研修会や勉強会に積極的に参加することに加え、連携先の各種専門機関への見学や共同での勉強会の提案等に取り組めます。</p> <p>③ICT環境整備など、業務の効率化について広く法人内にも意見を求め、業務遂行上必要な環境を整備します。</p>	
評価調査者記入	評価で確認した特徴的な取り組みや工夫点	<p>「大白書ほうかつだより」は、色映えがするコート紙を用いて、イラストや図を取り入れわかりやすく作成しています。地域の方に地域包括支援センターの取り組みに目を通し理解してもらいたい思いから総計950部配布しています。朝のミーティングでは、当日の職員予定、複数職員で対応した方が良いと思われる新規相談案件を情報共有し、困難事例を1人で抱え込まないように配慮しています。事務所は狭い中ではありましたが、すべての机を着座して廊下に目が行くように配置し、全職員が訪問時笑顔で挨拶できるように工夫しています。</p>	
	次のステップに向けた気づきや期待したい点	<p>法人からのフォローアップにより、個室の相談室も必要に応じて確保できますが、地域包括支援センター内では個別に相談できる部屋がありません。相談室があればプライバシー保護が一段と保たれると考えます。民生委員と交流を求め、困ったときの駆け込み寺に思っただけのように交流を深めていますが、日頃関わるのが少ない年代の方への周知活動に期待しています。</p>	

評価項目・着眼点	基本目標1:生きがいを感じながら暮らすための支援の充実	
	(基本的な考え方) 人生100年時代、介護予防に努め、いつまでも自分らしく、生き生きと暮らすことが大切です。そのために、身近な地域活動への参加を増やし、継続することが必要となります。その生活スタイルを周知するとともに、地域活動の場へ通い続けることができる環境づくり、地域で役割をもって暮らすための地域づくりに取り組みます。	
		介護予防に関する認識の変革
	①	85歳以上の高齢者に対し、「通いの場」である「いきいき百歳体操」と「認知症サロン」への参加促進を行い、フレイル予防につなげる。 市民向け講座などでフレイル予防に関する啓発・周知を進めフレイルの危険因子を持つ人等を早期に発見する取り組みを進める。
	高齢者が通える場があるまちづくり	
②	介護予防への意識が高くない高齢者を通いの場に誘導するとともに、フレイル等で通いの場への参加が中断することを予防するための取り組みを充実させる。	
センター記入欄	取り組みの状況	①高齢者の集いの場において年に1度、フレイルチェックを行っています。結果を後期高齢者医療保険課に報告し、分析結果をもとに次年度の取り組みに反映させています。一例として今年度、口腔機能低下が見られるグループに歯科衛生士による講座の開催を提案、実施予定です。 ②「ほうかつだより」にいきいき百歳体操や認知症サロンの紹介記事を掲載し、参加者の増加を目指しています。また、参加を中断されている方への再度のアプローチを世話人の方と協力しながら試みるようにしています。
	現在課題と感じていること	①通いの場に参加されている高齢者の方は比較的フレイルの危険因子が少ない方が多く、対して、何らかの原因によって参加が出来ていない高齢者にフレイルのリスクが高く、ジレンマを感じています。 ②集いの場へ参加を促す際に障壁となっている要因に会場への距離の問題や会場での段差移動時の困難さが挙げられます。加えて、高齢化が進む世話人の後継者確保についても悩みを抱えています。
	目標達成のための今後の取り組み	①「ほうかつだより」の内容を精査し、通いの場に参加できていない高齢者に向けてもフレイル予防の情報はじめ、有益で興味を持っていただける記事を掲載します。自治会役員や民生児童委員と協働し、確実にお手元に届き、紙面に目を通していただけるよう働きかけます。 ②各グループの世話人と協議し、困りごとや運営上の課題についてお話を聞き対応することで負担の軽減を図ります。また、会場の環境整備について、可能な範囲で改善方法を共に検討します。
評価調査者記入欄	評価で確認した特徴的な取り組みや工夫点	家にいながら、手軽にできるフレイル予防の方法を大白書ほうかつ便りにてお知らせする予定です。地域包括支援センターの名称は、漢字が並び高齢者の方にはわかりづらいのではないかと、読み手に寄り添った思いから、「よろず相談所」とピックスを添えて、職員の顔写真とともに業務内容を伝えた大白書ほうかつ便りを作成し配布しています。日頃より小さな気づきを業務に活かし暮らしやすい地域作りを全職員協力し目指しています。
	次のステップに向けた気づきや期待したい点	ハードルは高いですが、地域住民にわかりやすい言葉で情報発信を続けてほしいです。何らかの原因で参加できない方にも有益な情報を継続して発信するとともに、各グループの運営者との交流を深め、継続できにくい課題が出来ても一緒に考えていける環境を整えていくことで、できる限り継続的に運営できるよう期待しています。

評価項目・着眼点		基本目標2: 困りごとを地域全体で受け止める体制の構築	
		(基本的な考え方) 日常生活圏域単位に市民に身近な場所への地域包括支援センターの設置を継続し、地域の高齢者、その介護者の生活スタイルに対応できる相談体制の強化を行います。困りごとを抱える高齢者やその家族への支援を行う中で、地域共生社会の実現に向けて、他との連携を進めていきます。	
		①	地域包括支援センターの相談機能強化
			地域包括支援センターの専門性を活かした相談機能を強化する。
②	世代や分野を超えた地域のつながりの構築		
	地域共生社会の実現に向け他分野との連携を強化する。		
センター記入欄	取り組みの状況	①新たに受け付けた総合相談案件については、毎日のミーティングにて職員全員で情報の共有を行っています。職員それぞれの専門的な視点から意見交換を行い、適切な支援法の選択に繋がっています。 ②圏域内の自治会をはじめ老人会、民生委員といった主に高齢者を対象に活動を継続している団体との連携に注力しています。今年度、校区内の中学校にて認知症サポーター養成講座を開催することができ、教育機関との連携を持つことができました。多世代を含む他の社会資源にも波及できるよう取り組みを継続します。	
	現在課題と感じていること	①業務の全体量が多いため、個別事例について十分な検討時間が確保出来ていないと感じています。業務全般を見直し、優先順位を付け一層効率化を図る必要があると考えています。 ②圏域内の3校区には環境や社会資源の量に大きな差異があります。地域包括支援センターに求められる「中立性」の実現には校区ごとの課題を的確に抽出し、対処しなければなりません。地域に出向き、対話を重ね、相互理解を深めることが必要不可欠であると感じています。	
	目標達成のための今後の取り組み	①効率的に業務を進めるにあたって、地域包括支援センターの職員のみならず、法人全体で取り組むよう働きかけます。また、初めて地域包括支援センターの業務委託を受け経験値が低いことから、他の地域包括支援センターにも積極的にアドバイスが求められるよう関係性の構築に努めます。 ②地域の金融機関や商業施設といった民間の企業に対してのアプローチが十分ではないため、自治会役員や民生児童委員の同行訪問等の協力を得ながら連携強化に注力します。	
評価調査者記入欄	評価で確認した特徴的な取り組みや工夫点	日ごろの生活で問題となる場面を取り上げ、認知症サポーター養成講座を小中学校で実施、又は実施予定があります。子どもから心配のある方の情報を得ることもあり、小学校で実施予定のサポーター養成講座には父兄の参加をお願いできないか学校に打診中です。法人の援助協力体制が整っているため、休日開催の行事でも参加するように努めており、自治会や児童民生委員との関係性を大切にし、気軽に声をかけていただけるように連携体制構築に努めています。	
	次のステップに向けた気づきや期待したい点	寸劇やクイズを通じた認知症サポーター養成講座の開催を多世代に広げられるよう願っています。そこから地域共生社会の実現へのきっかけを得ることもあると考えます。今後の動向に大いに期待しています。	

評価項目・着眼点	基本目標3:地域で暮らし続けるための支援の充実	
	虚弱・軽度要介護者の重度化防止、自立支援のために、地域活動への参加など多様なサービスの活用を図ります。	
		多様なサービスの活用
	①	地域の通いの場や多様な主体で展開される介護予防生活支援サービス、在宅医療・介護の連携体制及び認知症高齢者等への支援に係るサービス(地域支援事業)を効果的に活用する。
	②	地域活動への住民参加や支援体制整備のための取り組み 地域ケア会議推進事業、生活支援体制整備事業、通いの場の充実、認知症の人への支援などの取り組みを通して地域の支援体制の充実を図っていく。
③	地域社会資源の開発とネットワークのための取り組み 高齢者が地域で暮らし続けるための社会資源を開拓していくとともに社会資源との連携が出来るようになる。	
センター記入欄	取り組みの状況	①地域の通いの場についての情報は主に「ほうかつだより」を活用しながら情報の発信に努め、介護予防の重要性をお知らせしています。 ②一校区において、住民アンケート実施から地域課題を抽出し、各種団体からの出席者と共に話し合いの場を持つといったまさに生活支援体制整備事業への取り組みに参画しています。 ③インフォーマルサービスの情報を更新し、地域住民に情報を発信しています。居宅介護支援事業所に対してサービス毎の一覧表を配布しています。
	現在課題と感じていること	①地域によっては集いの場までの距離が遠く、希望はありながら断念せざるを得ないといった実態があります。 ②各事業に対する3校区の取り組みの進捗状況に差異があります。モデル地区で得た学びを他地域に反映させることが責務であると感じています。 ③特に社会資源に乏しい地域におきましては、あんしんサポーターの数も限定されており、マッチングが著しく困難な状態にあります。
	目標達成のための今後の取り組み	①地域内に通いの場を増やす為にはまず、世話人の確保が必要である為、自治会役員や民生児童委員と情報交換を行いながら、候補者選定のお手伝いをします。 ②地域ケア会議を実施することが出来ていませんので、地域包括支援センターが主体となって開催します。 ③相談案件への対応を通じて、新しい社会資源の情報を収集したり、すでに把握している社会資源の変更点について随時、情報をアップデートします。
評価調査者記入欄	評価で確認した特徴的な取り組みや工夫点	食事の宅配が必要な方に利用ができるように手伝いをしています。宅配を取り入れることで安否確認に繋がっています。また、各事業所と交流を持ち情報共有に努めるとともに地域のケアマネジャーと連携し、困りごとを抱える事例の早期発見と課題解決に努めています。
	次のステップに向けた気づきや期待したい点	後継者がいないことで、いきいき百歳体操グループが解散されることがあるとうかがいました。今後より一層自治会、民生児童委員連合会と交流を持ち続け、交流の場の継続維持と新たに交流の場を開拓されることを期待しています。

評価項目・着眼点		基本目標4：認知症とともに暮らす地域の実現	
		認知症は誰もがなりうるものであり、認知症になっても、住み慣れた地域の中で尊厳が守られ、自分らしく暮らし続けることができる共生社会を目指します。また、認知症の発症を遅らせることができる可能性が示唆されていることを踏まえ、予防(認知症になるのを遅らせる。認知症になっても進行を緩やかにする)に関する取り組みを推進します。	
		①	認知症にやさしい地域づくり
			認知症サポーターが地域で活躍できる機会の充実を図る。認知症の人本人が、自身の希望や必要としていること等を本人同士で語り合う場を設置する。
		②	認知症になるのを遅らせるための取り組み
高齢者が身近に通える場等の拡充。通いの場を活用し、認知機能低下がある人や、認知症の人に対して、早期発見・早期対応が行えるよう、医療機関とも連携した支援体制の整備。			
③	認知症になっても地域で暮らし続けるための取り組み		
	認知症の類型や進行段階、生活環境に応じた適時・適切な医療・介護に提供が出来るようになる。		
センター記入欄	取り組みの状況	①圏域内の中学校で認知症サポーター養成講座を開催しました。多世代の住民に認知症の理解を深めていただく機会となりました。認知症サロンには毎月参加し高齢者関連の最新情報を発信するよう努めています。 ②集いの場への参加促進に注力しています。参加者に対して認知症予防や早期発見の重要性を伝え、意識の向上を図っています。 ③認知症に関して相談があった場合には認知症ケアパスを活用し、高齢者の方にも分かりやすい説明を心掛けています。	
	現在課題と感じていること	①認知症の進行と共に当事者が集いの場に参加できなくなる場合が多くあります。不参加になられた方への対応策が不十分であると感じています。 ②独居の高齢者が増えているため、情報の入手、共有が困難な事例が多くあり、スピーディーな対応を妨げています。 ③知識として認知症を理解することができても、当事者意識を持っていただくことは容易ではありません。実際の事例を紹介する等、伝え方に工夫が必要であると感じています。	
	目標達成のための今後の取り組み	①集いの場の一つとして参加者は少ないながらも「男性介護者の集い」を開催しておりますが、今後も月1回の実施を継続します。 ②独居高齢者への見守り活動を継続されている地区の民生児童委員との連携を強化し、情報の早期入手を図ります。困りごとに対して初期段階から関与することで対象者の重度化を防止できるよう努めます。 ③認知症に関する研修会や勉強会に積極的に参加し、地域包括支援センターの職員としての対応力を磨くことで対象者の「生活の質」を守ります。	
評価調査者記入欄	評価で確認した特徴的な取り組みや工夫点	認知症サロン3か所継続中です。地域包括支援センター内で開催される認知症サロンでは「健康づくりの会」が運営しています。毎回職員が出席し「フレイル予防講座・詐欺注意喚起」も行いました。男性介護者の集いの参加者は現在4名ですが、ベテラン介護者が新人介護者にアドバイスをしたりと有益な会になっています。点と点の対応を意識し早め早めに関係性を築くようにしています。	
	次のステップに向けた気づきや期待したい点	認知症から介護施設を利用することに抵抗感がある場合がありますが、現在の施設は以前の施設と全く変わっていることを情報として知らないことが多く、民生委員の施設体験(デイサービス)トライアルを実施しています。この取り組みを広げていくことで正しい理解を民生委員より広げてもらうことに期待しています。	